富山県知事賞

あの日出会って

黒部市立清明中学校　三年　寺田　妃和佳

「北方領土問題」私がこの言葉を初めて耳にしたのは、小学生のときです。休日、母と行ったまちのイベントで「北方領土問題」について知りました。そのころは、北方領土の歴史は私にとってとても複雑で難しく感じました。でも、この問題のせいで苦しんでいる人がいる。このことは、幼いながらに強く感じました。母の目は少しうるんでいたように思います。

このイベントで私と母は署名運動に参加しました。「この問題で苦しんでいる人たちを励ましたい。」その一心でした。それまで、テレビや新聞で見たり聞いたりしたことしかなかった北方領土問題。署名活動に参加し、縁もゆかりもなかった北方領土がまるで自分の故郷のように感じました。私、たった一人の署名。それがたくさん集まって大きな力となる。北方領土返還に向けた活動が広まり、続いてほしい。心から願いました。

小・中学校での学習を通して、日本には北方領土以外にも他国に不法占拠されている領土があると知りました。不法占拠の理由にはさまざまな背景があります。元島民の方々の平均年齢は八十歳を超え、いよいよ時間が残りわずかです。一人でも多くの元島民の方々に心の霧を晴らしてもらえるよう、返還を急がなければなりません。

私たちは、十一月六日に根室市の高校生二名と元島民の方約十名から北方領土についてお話を聞きました。根室高校のお二人からは北方領土の歴史や現状、返還運動など様々なことを学ぶことができました。根室高校には北方領土根室研究会という部活動があり、署名運動や出前講座を行っているそうです。北方領土に興味をもち、それらを広める活動をしている根室高校の方々は素晴らしいなと思いました。また、「私もいつか根室高校の方々のように、問題から目を背けず、行動に移せるような人間になりたい。」そんな、憧れをもちました。お二人の発表の中で印象に残った言葉があります。それは、

「北方領土返還の夢は、まだかなっていません。でも、これまでの活動をやめてしまうと北方領土問題が風化してしまいます。だから私たちはこれからも活動を続けていきたいと思っています。」

という言葉です。年々、生きておられる元島民の方々は減り、平均年齢も上がってきています。北方領土問題について考える若者がいなくなってしまうと、元島民の方々の思いを受け継ぐ人が途絶えてしまいます。そんな未来を想像し、ぞっとしました。北方領土に触れるきっかけは、ほんの些細なことでいいと思います。そこから、北方領土に対して、問題意識や正しい知識をつける人が増えてほしいです。

元島民の方々は、当時の写真をカラーに編集したものをまじえて、お話をしてくださいました。写真には、休み時

間校庭で遊んでいる子どもたちや運動会の様子などが写っていました。今の私たちとなんら変わりのない様子で、この生活が奪われたと思うと心が痛くなりました。島々から逃げるときも悲痛な思いをしたそうです。ロシアの兵隊が家にきたときも、「何もできなかった。何をされるか分からないから、とても怖かった。」そう元島民の方はおっしゃっていました。今でも鉄砲をもって家に入ってきたロシア兵を忘れられないそうです。

小学生のときに出会った北方領土問題。中学生となりあのころより、より理解や知識が深まりました。あの日、北方領土問題にふれたことで、この学習にだれよりも強い思いで参加しました。まだまだ、北方領土問題について知らない人が多いと思います。これらの話を家族や身近な人に伝え、その輪が広がっていってほしいです。私にできることは小さいけれど返還につながる一歩だと思います。

北方領土問題対策協会理事長賞

七十八年後の故郷

黒部市立明峰中学校　三年　**谷本　和奏**

終戦から七十八年。その間北方領土はロシアに占領され続けている。日本はサンフランシスコ平和条約で、これまで領土としていた千島列島と南樺太を放棄した。双方で食い違っているのは、千島列島に北方領土を含めるかどうか、ここで意見が対立しているわけだ。そもそも、ここにはアイヌ民族が住んでいたのだから、どちらかというとアイヌ民族の土地ではないだろうか。なぜ日本は北方領土という『土地』にこだわるのか。ということがこれまでの私の考えだった。

「ジョバンニの島」という作品を観た。実話だそうだ。美しい自然の中で暮らしていた人々の前に現れた大きな船はソ連の船で、日本人は銃を突きつけられた。当時暮らしていた方もおっしゃっていた。

「生で銃を見たことないでしょう。あれを突きつけられて…本当に怖かった。」

ソ連の兵士達は突然やってきた。そこから日本人とロシア人の奇妙な共同生活が始まった。そして数年後、日本人は島を追い出された。

自然が豊かな美しい故郷。家族や友人との思い出がつまっている故郷。そんな故郷と突然引き離されてしまった。その思いは私は分からない。だが、住んでおられた方々の話には、ソ連兵が来たときの恐怖、突然故郷を奪われた怒り、そして返してほしいという切実な願いがあった。私の思っていたよりもはるかに大きな思いだった。元島民は「土地」を返してほしいのではなく『故郷』を返してほしいのだとそのとき初めて気づいた。

だが、七十八年経ってしまった今では、ただ北方領土が返ってくれば問題は解決するというわけではなくなってしまった。なぜなら、北方領土はロシア人が住み始めて七十年以上経過している。彼らの『故郷』にもなってしまった

のだ。もし、日本が力づくで奪い返せば、彼らは日本が侵略したように思って負の連鎖が起こる可能性がある。だから慎重に、だが悠長にしているとロシア人の北方領土への思いは強くなるので早急に、そして未来へ遺恨の念が残らぬよう話し合いで返還されなければならないだろう。

さらに、北方領土には豊かな海があり、ロシアにとっても日本にとっても決して手放したくない土地だろう。このように北方領土問題はとても難しい問題である。

だからこそ私も、私たちにできることは「知る」こと、活動を「続ける」こと、そして「忘れない」ことだと思う。現在の日本で、北方領土について詳しく知っている人はあまりいないだろう。竹島も尖閣諸島も教科書に載っていた程度の知名度だろう。私も、黒部市に住んでいなかったらそのくらいの意識だと思う。だが、北方領土の元島民の高齢化が進む今、私たちは活動を続けていかなくてはならない。

終戦から七十八年。北方領土問題についても原爆についても体験者は高齢になり、当時の思いを話せる人は少なくなってしまった。だから、話を聞くことができた私たちは絶対に忘れてはならない。忘れずに、彼らの思いを未来の子供たちに伝え、活動を続けていくことが大切なのだろう。

北方領土返還要求運動富山県民会議会長賞

永遠

黒部市立清明中学校　三年　**杉本　茉璃**

私は、生地小学校出身です。私が日々を過ごした生地小学校では、二月七日に「北方領土の日」記念給食があったり、北方領土の調べ学習を授業で行ったりと北方領土に触れる機会が、多くありました。富山県は、戦後、北方領土から引き揚げてきた人が北海道に次いで多く、そのため交流も深かったと思います。私自身とはあまり関わりのない北方領土問題に対し、以前まで他人事のように思っていましたが、少しずつ問題を知っていくことで、関心が深まっていったと思います。関心が深まるなかで、疑問に思うことや未だによく「北方領土」について知らないことが多かったです。そんな多くの疑問をいだきながら中学校に進み、月日が経っても疑問が解決されぬまま過ぎていきました。

そんななか、私に訪れたのは、富山県少年少女北海道派遣団員募集の話でした。私は、自分が日々過ごしたふるさとを奪われたりしたら平常心を保つことはできないと思います。そんな思いを今この瞬間もされている方々が北方領土の元島民の方々です。私は、自分に少しでもできることはないかと思い、参加することにしました。八月四日から八月七日までの三泊四日で、他の中学校の生徒をふくむ計

九名で行きました。実際に北海道を訪れてみて感心したことが大きく分けて二つあります。

一つ目は、研修三日目の八月六日に行われた北方領土返還要求根室市民大会式典についてです。たくさんの方々が発言されたなかで鈴木議員のある言葉が深く心に刺さりました。その言葉は、「あなたたちの世代が主役」というものでした。私たちの一つ一つの努力がこれから大切になっていくのだと感じました。一日一日経てば経つほどこの「北方領土」に関する問題の意識はうすくなっていくと思います。そういえる理由として、年々元島民の平均年齢が高く推移しており、今ではもう八十五歳を超えているからです。少しずつ平均年齢が高くなっていくことから、いずれ「北方領土」に関する問題の意識はなくなっていくと思います。そんな事態を防ぐためには、私たち若い世代が発信し、広めていくことが大切になっていくと思います。そのためには、一人一人が意見を出し合い、話し合っていくことが重要になっていくと思います。鈴木議員の言葉を胸にひめ、私は周囲の人へ少しずつ発信していきたいです。

二つ目は、元島民の方々の数々のお話です。家に土足で踏み入れられたことや大切なふるさとを奪われたことなど信じられないほど辛いものばかりでした。ふるさとで過ごすことが叶わなくなってから、元島民の方々は今この瞬間も心が痛いと思います。だからこそ、私たちは、解決の糸口も見えない今から、変えていかないといけないと思います。この一人一人の支えは小さな一歩だけれど、その一歩は、続けていくうちに大きな一歩となり、結果として現れてくると思います。

私が思ったことは、以前の私のような考えの人を減らしていくことが重要だということです。一人の努力だけでは解決することができないこの北方領土問題は、「塵も積もれば山となる」ということわざの通り、一人一人が意識することで、長い間動くことのなかったものが、変わっていくと思います。一人の頑張りで一人の幸せは戻ってくると思っています。私自身も身近なところから、理解を深めていきたいです。

富山県教育委員会教育長賞

無関心という危機

高岡市立福岡中学校　二年　**関　芽生**

「その距離三・七キロメートル」

そう聞いて人々は何を思い浮かべるでしょう。学校？駅？いつも遊びに行くショッピングモールまでの距離？北方領土までの距離だと気付く人は、果たしてどれ位いるのでしょう。

北海道の納沙布岬から北方領土の歯舞群島の貝殻島までの距離が三・七キロメートルだと知った時、そのあまりの近さに驚きました。私がよく買い物や映画を観に行くショッピングモールより近かったからです。また、そんなに近いのにどうしてロシアによる不法占拠が依然として続

けられているのか不思議になりました。それと同時に、北方領土について詳しく知らないことに気付き、私はまず知ることから始めようと思いました。

私は黒部市にある富山県北方領土史料室に行き、北方領土について詳しく調べました。それは私が思う以上に期待と絶望に満ちた歴史でした。

富山県と北方領土の関わりは、江戸時代から始まります。富山には、北前船の中継地としての港や廻船問屋があり、また生地村（黒部市）の庄屋が遠洋漁業を広めたとの記録もあります。

明治に入り、北海道に出稼ぎに行った生地村の人々が、大きな利益を得て以降、出稼ぎ漁業者が増えていったとのことです。自然環境は厳しいけれど、魚や良質な昆布が多く採れるという夢の島に期待に胸をふくらませ、渡って行かれたことでしょう。越中衆と呼ばれた富山県出身者が歓迎されたのは、

「越中衆のあとはぺんぺん草も生えない。」

と言われる程、真面目に働いて信頼を集めた結果だと思います。

明治の終わり頃になると、漁業不振と災害で困窮した多くの富山の人々が、先に渡って漁業経営者となっていた人たちを頼って島に渡ったそうです。入善や魚津などからも家族ごと移住したそうです。水害や不漁で絶望の淵にいた時、永く現地で活躍している同郷の人々は、暗闇の中に輝く一つの光明のようであったことでしょう。

このように自然・生活環境が厳しい北の地を私たちの祖先が苦労して開拓し、一つ一つを築き上げ活気あふれる豊かな生活を送っていたのが北方領土です。

では、その帰属についてはどうでしょう。日本が北方の島々について知ったのは十七世紀初めのこと。ロシア人が初めて千島列島を探検した一七一一年のはるか百年近く前のことです。以後、一八五五年の日露通好条約から一九五一年のサンフランシスコ平和条約までの四つの条約の内容から見ても、北方領土が日本固有の領土であることは間違いありません。一九四五年、日本がポツダム宣言を受諾した後にソ連が北方四島に侵攻してきました。一方的にソ連領に編入して、全ての日本人島民を強制退去させました。この時の島民の絶望感は想像に難しくありません。ソ連が崩壊してロシアとなった現在もなお、不法占拠が続いているのです。

私は一から調べ直し、先人達が長い年月をかけて島を開拓し、築き上げた生活を一瞬にして奪われた計り知れない悲しさ、そして、元島民の方々が故郷に帰ることが出来ていない現実を知りました。そして、教科書では小さくまとめられていることが悔しくなりました。北方領土までわずか三・七キロメートル、その問題は北海道だけ、元島民だけの問題ではありません。元島民の方々の平均年齢は八十七歳を超えています。

私達若い世代が自発的に知り、情報を発信し、人々に関心と理解を求め、世代・地域を超えて返還に向けた強い意志を共有し、今後の外交交渉を後押しすることが必要だと思います。

富山県市長会会長賞

北方領土返還のためにできる私の第一歩

黒部市立明峰中学校　三年　村山　麗

「みなさんは、北方領土問題を風化させてはいけません。」

これは総合的な学習の時間に北方領土の元島民の語り部の方に言われた言葉だ。私たちを見つめる瞳の奥には、心から伝えたい北方四島返還への願いが込められていると確信し、私はようやくこの問題が他人事ではなく今を生きる自分にも関わりがあると理解した。

富山県は北方四島からの引揚者が北海道に次いで二番目に多く、北方領土にほど近い北海道根室市と黒部市は姉妹都市として交流がある。富山県は根室や羅臼に大勢の人が出稼ぎに行き、昆布の漁場を開拓して生活していたという過去があり、とても縁が深い。北方領土は昭和二十年に日本がポツダム宣言を受諾した際、ソ連が侵攻を始め、ソ連が崩壊した現在もなお、ロシアが不法占拠している。

私たちは北方領土の学習の際、元島民の語り部の方々に話を聞いた。語り部の方々はとても高齢で杖をついていたり、支えられながら歩いたりしておられ、正直驚いた。

語り部の方々の話によると、北方領土周辺は世界三大漁場の一つで、資源が豊富な漁場だということが分かった。その他にもたくさんのことを語ってくださった。島では味噌汁とご飯という質素な暮らしをしていたこと、それでも日々充実していたこと、昆布漁を一家で営んでいたことなど。生き生きと話されるその姿を見て、私は四ヶ月にわたり北方領土の学習で調べ続けてきて初めて「ああ、北方領土も大切な日本人のふるさとだったんだ。」と実感した。生の言葉から伝わってくるその思いは私の心に響いた。

また、授業では学校の先生が交流事業で撮影してきた写真を見せてくれた。そこには納沙布岬からわずか三・七キロメートルしか離れていない歯舞群島、貝殻島が写っていた。先生は肉眼で見える距離にあるとおっしゃった。「近いのに遠い」そんなにすぐ近くにある島が自分たちが住めるようになるのは難しいと分かり、胸がいっぱいになった。

北方領土問題を風化させず、訴え続ける。北方領土について語り部の方々に聞いた日から、私たちはこのたすきを受け取った。受け取ったたすきを次につなげるには、私は北方領土問題をより多くの人に知ってもらい、この先何年も語り継いでいくことが重要だと考えている。北方領土問題について情報を発信できる人がいなくなると、今後の領土問題が進展しなくなる。北方領土が故郷であり、今もなお故郷に帰れない人がいることを忘れてはいけない。そのためにも、この問題をより多くの人に知ってもらい、日本全体で返還運動に取り組むことで、少しでも解決に近づいてほしいと思っている。また、今回の語り部の方々の話によって、北方領土問題が他人事ではなく、自分たちも関心をもつべきことだと分かった。だから、私たちのように元

島民の方々の話を生で聞く機会も増えるとよいと感じた。
　現在では富山駅や身近なところで署名活動が行われている。日本のよりよい未来を作る一歩は、誰でも気軽に踏み出すことができる。私は北方領土問題が解消され、ロシアとの友好関係を築ける時代が来ることを願っている。そのために、身近な人に伝えるという第一歩を踏み出したい。

富山県「北方領土問題」教育者会議会長賞

「幸せ」を求めて―北方領土返還への願い―

黒部市立明峰中学校　三年　**市六　音色**

「みなさんは鉄砲を向けられたことはありますか。」涙ながらにこう語ってくれたのは、元島民の一人であるおばあさんだ。
　第二次世界大戦が終わって間もなく、北方領土がロシアに占拠された。当時、島には約一七三〇〇人の島民が住んでおり、そのうちの半数近くが自力で脱出。残りの島民はソ連の指導下での不自由な生活と、後に強制退去を強いられた。命を落とした人も少なくなかったそうだ。なぜ、このような悲劇を生んでしまったのか、私は総合的な学習の時間を通して様々な知識を得て、自分の考えを持った。
　社会の授業や調べ学習で北方領土問題について理解した私たちは、「ジョバンニの島」という映画を見た。まず最初に描かれたのは、北方領土で暮らす人々の様子だった。とても裕福とは言えない生活だったが、美しい自然と雄大な土地の中にいる彼らは幸せそうに見えた。ところがある日、「露助（ろすけ）」と呼ばれるソ連軍がやってきて、状況は一変した。日々、ソ連軍に対する恐怖に怯え、家族がバラバラになったり、大切な人を失ったり、そこには島民の日々の幸せとかけ離れすぎている生活があった。この映画を最後まで観たとき、私は北方領土問題について「理解したつもりになっていただけだった」と感じた。私はこれまで歴史上の出来事としてしかこの問題を見ていなかったのだと思う。ロシアが日本の領土を不当に占拠したという事実しか知らなかった。でも実際は、島民の人々の生活と幸せを奪い心に深い傷を残した、言葉では簡単に表せない程のひどいことだったと分かった。これをきっかけに北方領土問題に対する見方が変わり、もっと詳しく知って「ちゃんと理解したい」と思うようになった。
　しばらくしてから、今度は北海道根室高校の生徒の方の講演を聞いた。北方領土の総面積は五〇〇三平方キロメートルで東京都や滋賀県、富山県より大きいそうだ。また、歴史を辿っていくと、北方領土は先人達が開拓してきた、他国の領土になったことのない日本固有の領土だと分かった。そして現在の北方領土は、開発やごみの放置で豊かな自然と動物が傷つけられていると教わった。私は、日本の大切な土地が私たちの知らないところで荒らされていくことに虚しさを感じた。
　そして元島民の方々にもお会いすることができた。富山県と北方領土の関係の深さについて資料と共に教えて下

さった。また、当時の生活や島の様子などについても語られた。

ここで始めのおばあさんの話に戻る。

「私は当時、家族で北方領土に出稼ぎに行っていました。両親が採ってきた昆布を裸足で砂浜に並べて乾かしました。大変だったけど幸せでした。でもある日『露助』が私の家にやってきたんです。そして四歳くらいの私に鉄砲を向けました。みなさんは本物の鉄砲を見たことがありますか。怖くて母にしがみつくしかなかった。今でも忘れられません。」おばあさんは辛い過去を思い出して声を震わせながらも私たちに訴えるように話された。そして、「私たちは何も悪いことをしていないのに。」と何度も言われた。私はその言葉の一つ一つが心に刺さり、震えてしまった。

北方領土学習を通して、様々な感情に触れることが出来た。先程のおばあさんを含む元島民の方々をはじめとする北方領土返還を強く願う人々の思いを知った。なぜ彼らは自分が辛い思いをしてまで語るのか、それは私たち若い世代に伝えることでこの問題を風化させたくないから、そして北方領土を返してほしいからだ。私たちにとって決して他人事ではない、常に向き合うべき問題だ。しかし、元島民の数は半分以下となり、平均年齢も八七・五歳となった。だからこそ今度は私たちが伝える番だ。絶対に解決させなければならない。未来を担う私たちが「情報発信者」として伝え続けることを私は今、心に強く誓う。

入選

未来につなげていくために

黒部市立清明中学校　三年　**柏原　彩華**

「富山県は北方領土からの引揚者が多い」これは、北方領土学習をして初めて知ったことだ。私の住む黒部市は、富山県内で最も引揚者が多い。しかし、私が北方領土について知っていることは少なく、どのような経緯で問題が起きたのか、そもそもどのようなことを北方領土問題といっているのか全く無知の状態だった。

北方領土は四島からなり、ロシアとの問題があることは今までの社会科での学習の知識として知っていた。習ったときは、そんな問題もあるんだなと、自国の問題としての実感が沸かなかった。北方領土学習が始まり、遠い存在だと思っていた問題が意外にも身近な問題だったことに驚いた。北海道本島からの距離三・七㎞、これは私の通学距離よりも短かったためとても近いと分かった。また、富山県は北方領土との関わりが深いということを知り、今まで知らなかった北方領土への興味が沸いた。

北方領土は日本固有の領土であるという主張を耳にしたことがある。ロシアと問題になっているのになぜそう言っているのか疑問だった。しかしこれは、以前にロシアと結んだ条約を見て納得した。一八五五年の「日魯通好条約」では両国の国境は択捉島とウルップ島の間とし、ウルップ

島から北の千島列島はロシアの領土、択捉島を含む四島は日本の領土であることが定められた。つまり、北方領土は千島列島に含まれないということが分かり、驚いた。その後何度か条約を結んでいるものの、いずれも北方領土については触れられていない。これらの事実を知り、日本の領土である北方領土はロシアに不法占拠されていると言われている理由に納得することができた。ロシアに占領されたために戦後、住んでいた場所を去らなければいけなかった島民の方々を思うと胸が痛い。今、自分の住んでいる場所に住めなくなってしまったら、これから先の生活への不安でいっぱいになると思う。出前講座で来られた元島民の方々は「今でも思い出すと涙が出そうになる」「怖かった」などの当時の心境を教えて下さった。

また、北方領土の方とのビザなし交流や自由訪問などの活動があると知った。これらは日本人と北方四島在住のロシア人との交流で相互理解を深め、北方領土問題の解決を目指すものだそうだ。しかし、二〇二二年にロシアから一方的に破棄されてしまったことを新聞で知った。返還運動に長年携わってきた方の「交流がなければ、解決どころか返還運動も弱まる。」という不安が印象的だった。現在、北方領土問題の当事者の多くは高齢になり、継承してきた二世、三世の方々だけでは問題解決は難しいそうだ。調べ学習や出前講座を受けて、今まで解決のために尽くしてきた人がつないできたものが途絶えてしまってはだめだと思った。北方領土について学び、これからの時代を生きる私達にできることは自分が知っている情報を一人でも多くの人へ伝えていくことだ。

私は、北方領土学習を通して若い世代の北方領土への理解を深めることは返還に向けて必要なことだと考える。大人が頑張って返還や平和に向けての活動をしても、それを未来へ解決までつなげることができなければ意味がない。北方領土との関わりが深い富山県に住む者として、元島民の方のお話や北方領土について身の回り、他県の人にも発信をしていきたい。

入選

北方領土返還のために

黒部市立清明中学校　三年　**高橋　このめ**

「北方領土は日本の領土である。」この言葉が正しいといえるかはわからない。

私は小学校の時から北方領土という言葉を聞いてきた。「日本の人々の故郷を奪われた。」とよくいわれている。そのことに小学校の時は共感していた。しかし、広島での平和学習をした時から考えが変化した。

広島に落とされた原子爆弾によって多くの命を失ってしまった。日本の立場で見ると怒りがこみあげてくると思う。しかし立場を変えてみると、日本も、アメリカ人の命を奪っている。それと同様のことが北方領土にもいえる。北方領土をロシアが占拠すれば、日本人の故郷が奪わ

れる。北方領土を日本のものにすれば、ロシア人の故郷が奪われる。返還運動が増えているが、日本のことだけではなく互いが納得できる案を考えることが大切だと思う。しかし、北方領土が早く返ってきてほしいという気持ちもある。

理由は地元である生地の人々の生活を支えたのが北方領土だからだ。私の先祖も北方領土に住んでいたことがある。

北方領土と生地のつながりは、石田村の村長が生地の漁民に対し、北海道への出稼ぎを奨励したことから始まった。説得に応じ出稼ぎをするとかなりの収入が得られたことから三十五世帯もの漁民が北方領土へ出稼ぎをはじめた。一九〇六年ごろから昆布漁が盛んになり、根室、歯舞群島には越中村が作られた。

このことより北方領土の昆布漁は、生地の漁民によって発展したと言っても過言ではない。先人が汗を流しながら開拓した北方領土の返還のためにできることはたくさんある。

しかし北方領土返還運動が、世の中に浸透しているのかといわれるといえないと思う。私はこの学習をする前は、北方領土についてくわしく知らなかった。この現状を改善するために、私たちにできることは二つあると思う。

一つ目は、いろいろな場所で署名などを呼びかけることだ。私は北方領土の返還には、たくさんの人々の協力が必要だと思う。「ちりも積れば山となる」という言葉があるように、たくさんの人々の思いが集まることで大きな一歩を踏み出せると思う。家族、友人などたくさんの人に署名をしてもらい、返還の輪が広がっていくとよいと思う。

二つ目は、小中学校での北方領土の授業を取り入れることだ。自ら、北方領土のことについて学ぶ人は少ないと思う。北方領土について学ぶきっかけ作りが大切だと思う。外国で選挙についての授業を多く取り入れたところ、棄権が少なかったという実例がある。このように興味を持たせることで、返還運動への参加を増やすとよいと思う。今の若い世代が学ぶことで、親になった時に、子供に伝えることができ一石二鳥だと思う。

私たちが北方領土返還のためにできることはたくさんあると思う。元島民の方々のためにも、ロシアとの友好関係がよくなっていくとよいと思う。自分の故郷を奪われた方がいるという事実を忘れずに、これからも返還に向けて協力していきたいと思う。

入選

北方領土返還を願って

黒部市立清明中学校　三年　**髙山　夏漣**

私は北方領土の調べ学習をするまで、北方領土問題や返還運動は遠いところの話でありあまり関心がありませんでした。しかし調べ学習や元島民の方、根室の高校生の話を聞いて、北方領土は身近なものだということが分かりまし

た。

富山県、特に私が住む黒部市と北方領土は古くから交流が盛んに行われていて、元島民である方々がたくさん住んでいます。明治時代にはたくさんの人が家族とともに出稼ぎに北海道や歯舞群島、色丹島に移り住み、コンブの漁業を開拓したそうです。コンブ漁の仕事は、厳しく朝早くから夜遅くまで家族みんなで働くのです。私よりも幼い子どもたちも手伝います。島では良質なコンブがたくさん採れ、多くの人が豊かな生活を送っていました。また、島でも運動会や神社などの祭礼がにぎやかに行われ、楽しい一日を過ごしたそうです。しかし、一九四五年、ソ連はまだ有効だった日ソ中立条約に違反して対日参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後、北方領土をすべて占領しました。そして、ソ連は島の住民を強制的に立ち退かせました。ロシアの不法占拠は現在でも続いています。苦労して開拓し、たくさんの思い出のつまった島を急に追い出され、不法に占拠されたことを知りとても胸が痛みました。

十一月に北方領土出前講座があり、根室の高校生の方の話を聞きました。北方領土返還のためにさまざまな活動が行われていることが分かりました。その中には私たちでも簡単にできる署名活動がありました。他にも講演会などを行い、多くの人に北方領土問題を知ってもらう活動も行っているということも分かりました。また、一九九二年から、パスポートやビザなしでの渡航が認められ日本人と北方領土在住ロシア人との仲を深める事業も行われています。二〇二一年までの三十年間で、北方領土を訪問した日本人は一四三五六人、北方領土から日本を訪れたロシア人は一〇一三二人、計二四四八八人の相互訪問が実現されています。このような活動が行われているのにも関わらずロシアは不法占拠しています。

なぜロシアはそこまで北方領土にこだわっているのでしょうか。そもそもロシアは北方領土を不法占拠したと思っておらず、第二次世界大戦の合法的な編入だと主張しているのです。ロシアが北方領土を手放さない理由は軍事面にあるといいます。北方領土は太平洋への出口となっており、アメリカ軍と対峙する場所でもあります。ロシアにしてみれば、この地を基地化することで太平洋でのアメリカ軍の活動を抑止することができます。だから小さい島々とはいえ、手放すわけにはいかないのです。しかし、いかなる理由があろうと、北方領土を見つけ、苦労して開拓したのは日本人だという事実は変わりません。だからこそ、私たちは北方領土をとり返す必要があると考えます。

北方領土を返還させるためには、私たちひとりひとりが北方領土について学び、知ることが大事だと思います。北方領土の返還活動に積極的に参加し、日本に返ってくることを願っています。

入選

北方領土問題の平和的解決に向けて

黒部市立清明中学校　三年　**本島　絵子**

私が北方領土のことを知ったのは、小学生の時です。帰りによく通る道に北方領土返還のスローガンが掲げられていて、そこで初めて「北方領土」という言葉を知りました。当時は、何のことだろうと軽く考えるだけでしたが、成長するにつれて、北方領土の話をよく耳にするようになりました。そして、授業で行った北方領土学習がきっかけで、北方領土問題に関心をもつようになりました。

私が北方領土について調べた中で、特に印象に残っているのは、引き揚げ命令のことです。ソ連は、終戦後、島民達を強制的に引き揚げさせました。住み慣れた島で平和に暮らしていきたいと思っている人がいたにもかかわらず、島民達は島から引き揚げさせられたそうです。故郷を離れるのは、辛いことだし、島民の方々の苦しみや悲しみは、とても大きなものだったと思います。私は、このようなことは許してはいけないと強く感じました。しかし、それと同時に、現在北方領土に住んでいるロシア人にとっても、北方領土は故郷なのだと気付きました。もし、北方領土に日本人が戻れることになったら、ロシア人はどうなるのでしょうか。日本人が北方領土から離れることになったように、ロシア人も故郷から離れるしかない状況にならないでしょうか。そうなったら、ロシア人も日本人と同じように、苦しい思いをするはずです。そこで私は、北方領土でロシア人と日本人が一緒に暮らすことはできないのかと考えました。みんなで平和に暮らすことができたら、誰も傷つくことなく、北方領土問題を解決できると思ったからです。しかし、現実はそんなに簡単にはいかないようでした。なぜなら、ロシア人と日本人では、文化も生活の仕方も全く違うからです。もし、ロシア人と日本人が一緒に暮らすことになったとしても、絶対にトラブルが起こってしまうと思います。また、日本人のロシアに対するイメージが悪いことも、ロシア人と日本人が一緒に暮らすことが難しい理由の一つだと考えます。ロシアのことを「日本から北方領土を奪った国だ。」など、悪く思っている日本人も多くいるでしょう。私も、昔はそうでした。きっと、ロシア人の中にも、日本のことを悪く思っている人がいると思います。だから、ロシア人と日本人が一緒に北方領土で暮らすというのは、実現が難しいことなのです。でも、そこで諦めたら何も変わりません。私達にも、北方領土問題を平和的に解決するために、できることがあるはずです。そして、私は、自分にもできそうなことを二つ見つけました。

一つ目は、北方領土問題について詳しく知るということです。北方領土問題に関心をもち、調べることは、とても大切だと思います。私は、授業で北方領土について調べてはいますが、知らないことも多いです。なので、まずは北方領土問題について詳しく知ることが必要だと考えました。そして、学んだことを周りの人に伝えていければよい

と思いました。そうすることで、少しずつ北方領土問題について考える人が増えてくるはずです。

二つ目は、北方領土返還運動に参加することです。現在、署名活動や講演会など、様々な北方領土返還運動が行われています。中学生でも参加できるような活動なので、積極的に取り組むべきだと思います。

このように、北方領土問題を解決するためにできることは、たくさんあります。小さなことからでも行動を始めれば、少しずつ北方領土返還運動の輪が広がっていくのではないでしょうか。「ロシア人と日本人がお互いに歩み寄り、平和に北方領土問題が解決する。」そんなときが来てほしいです。

入選

故郷の大切さ

黒部市立清明中学校　三年　**吉田　理結**

私は今まで、北方領土問題に対して、全く興味がありませんでした。ロシアが日本の領土に不法侵入している、領土を取り返すためにはどうするべきなのか、などという話題を聞いても、それを私に言われても、私が生まれる前の話はよく分からない、という感情が私の本音でした。

しかし、学校で北方領土について話を聞いた際、私は驚いたことがたくさんありました。一番衝撃を受けたことは、北方領土からの移住者数が全国の中で富山県が最も多い県だということです。その中でも、黒部市の生地と魚津市の経田に多くの人々が移住してきたと知り、私は驚きました。なぜならその二つはそれぞれ、私の祖父母の家がある場所だからです。その資料を見た時、私は親近感がわき、北方領土問題について少し関心をもてました。

北方領土問題＝ロシアが悪い、私は長い間そのように考えていました。しかし実際は、どうなのでしょうか。現在の北方領土の島民の皆さんは生まれた時から北方領土に住んでいるため、北方領土はロシアのもの、と認識している方が多いです。そのため、ロシア人の島民の方々にとっては、手放したくない故郷になっているそうです。故郷を手放したくないと思う気持ちはどの国でも共通して思う気持ちです。

北方領土問題において、ロシアと日本は険悪な関係と思われていますが、北方領土でロシア人と日本人が共存していた時代があったそうです。それは今の世の中では絶対にありえないようなことです。原因の一つに上がるのは、今も続いているロシアによるウクライナ侵攻です。この問題も北方領土問題と同じようにロシアによる不法侵略によって起こっている問題です。現在ウクライナでは北方領土問題が関心を呼んでいるそうです。もちろんそれは、ロシアによる不法侵略という自国の問題と重ね合わせて考えているからです。しかしこのような考え方をしている以上、ウクライナ情勢も北方領土問題も解決することはできません。そのため、今回の課題である北方領土問題を解決する

ためにはどうするべきなのかを自分なりに考えてみました。

これからの時代を生きていく人々の中で一人でも多く、北方領土問題について興味を持ってもらえるよう、若者に最も身近な存在である、ＳＮＳを利用した啓発活動に力を入れていくことです。

しかし、これだけでは、解決することが難しいのが今の現状です。北方領土をすべて日本に返還させるというのはすごく難しい課題だと思います。そのため、せめて、元島民の人々は自由に北方領土へ訪れることができる、という環境になってほしいです。

いつか、ロシアから北方領土が返還され、元島民の人々が笑顔になれる日がくるよう、これから北方領土についてのニュースなどに関心をもっていきたいです。

この機会に北方領土問題に対して、真剣に向き合ってみて、故郷があるということは素晴らしい事だなと感じました。いつか日本に北方領土が返ってくる日がくることを心から願っています。

入選

返還されるべき北方領土

黒部市立明峰中学校　三年　**金物　杏奈**

「北方領土問題」それは簡単に解決することのできない問題である。一九四五年八月十五日、ポツダム宣言によって日本は戦争を終えた。しかし地獄は終わらなかった。ソ連と結んだ日ソ中立条約をソ連は無視し、北方領土を占領した。本当に身勝手で信じることのできない行動に、私は衝撃をうけた。

以前、根室市の高校生と富山県内に住む元住民の方々にお越しいただき、北方領土について話を聞かせていただいた。そして、「四島のかけ橋」というシンボル像があることを知った。そこには「祈りの火」が灯っている。これは北方領土問題が解決するまで消えない。消してはいけない。そんなことを教えていただいた。

私は元島民の方に話を聞かせていただいたとき、一つの話が心に深く刻まれた。それは、ある質問をしたときだ。「北方領土はどんな魅力がありますか。」すると、一人の年輩の女性が話してくださった。

「北方領土は本当にきれいな所です。でもある日、ロシア人が家に入ってきて、銃を突きつけてきました。あの頃を思い出すと今でも涙が出てきます。」

そうおっしゃっていた。想像すると体が震えた。きっと忘れたくても忘れることのできない辛い記憶になってしまったと思う。女性はさらに続けて言った。「私達は何も悪いことはしていない。」

それを聞いたとき、さらに胸が痛んだ。突然奪われた北方領土。それはただ奪われただけではなく、北方領土に住んでいた人々に危害を加え、一生忘れることのできない記憶を残してしまった。これは北方領土問題が解決するまで忘

れてはいけない。そう思った。
　北方領土問題について考える前は、あまり知識がなかったため、ロシアに北方領土が奪われたということしか知らなかった。しかし、元島民の方の話を聞かせていただいたり、北方領土の学習を進めていったりするうちに、あの日、日本が体験した辛い思いを知ることができた。そして、今までの学びを通して、私は二つのことを頑張っていこうと思った。
　一つ目は、北方領土問題を絶対に忘れないことだ。元島民の平均年齢は八十七歳を超えている。一刻も早くこの北方領土問題を解決して、元島民の方に美しい自然を見せてあげなければならない。そのためにも絶対にこの問題を忘れてはいけない。
　二つ目は、いろいろな世代に北方領土問題について知ってもらうことだ。私たちにできることとして、より多くの人にこのことを伝えていくことがある。この北方領土問題を、返還が終わらないまま過去のこととして捉えてはいけない。今も元島民の方々は北方領土の返還を待っている。またあの笑顔を、元島民の方々の笑顔を取り戻さなければならない。これからは北方領土問題について考える活動があったら積極的に参加してみようと思う。そして、また美しい北方領土と再会できることを私は願っている。

入選

北方領土返還について

黒部市立明峰中学校　三年　**込尾　詩恩**

　私は学校の総合的な学習の時間に「北方領土返還に向けてどんなことが行われているのか。」ということについて調べた。そして、講座・ビザ無し交流・マスメディアでの報道などを通じて、歴史的に見ても日本の領土であり、佐渡ケ島よりも近い位置に存在していることがわかった。
　十一月六日、この日我が校で北方領土講演会が行われた。講演会では、島民の方々が当時の暮らしや思い出、島への思いを涙ながらに語ってくださった。小学校に上がる前から親の仕事を一生懸命手伝っていたこと、毎日ご飯とおつゆだけの質素な食事をしていたこと、ロシア兵が家に鉄砲を持って押し入ってきたこと、二世の方々の親の気持ちを知ってほしいという思い、そのどれもが色濃く私の心に焼き付いた。また、ビザなし交流に行った方のお話では、近年北方四島に道路や工場ができ、廃船やゴミの山など四島の環境が問題になってきていることが分かった。
　ロシアはひどい国だと私は思った。北方領土を不法に占拠したあげく、あまつさえ四島の環境を破壊している。また、北方領土近海で漁をしている漁師さんが仕事を辞めることになったり、ロシアにおびえながら漁をしたりすることになるのは、不条理もいいところだと思ったからだ。し

かし、ビザ無し交流に行った方のお話によると、ロシア住民のみなさんは温かく出迎えてくれ、とても友好的な雰囲気だったそうだ。また、調べ学習の際、ビザなし交流に参加した島民の方についてまとめたサイトにも、北方領土が返還された後もロシア人と一緒に住んでもよいという意見が上がっているとあった。

これらのことから、ロシアはひどい国だという私の認識は、すべてロシア人が悪いわけではないというものに変わった。そもそも北方領土に住んでいる人に罪はない。だから、いろいろな意見はあるが、ロシアと日本で共生の道を共に歩むことが大切だと思った。

そのためにも、私は三つのことが大事だと思う。まず、北方領土についての歴史や島民の方の話や現状をたくさんの人が見聞し、北方領土に関する「自分の意見」をもつことだ。

次に、両方の国で北方領土について正しく報道し、相手国の人の生活や思いについて両国で認知を高めることだ。今の日本では北方領土についての教育が行われているが、ロシアではどうであろうか。占領から何十年もたっているのだから、当然何も知らない若者もいるはずだ。自分が生まれた郷土なのに、いきなり「日本の領土だから返せ」と言われてもたまったものではないし怒るはずだ。偏見の入らないあくまで中立的な立場から見た情報が両国で出回る必要がある。

最後に、ロシアとの外交交渉を粘り強く続けることだ。後腐れない平和的な解決のためにも、一人一人が当事者意識をもち、辛抱強く返還運動を続けることはなによりも大切である。

私は、もし返還がかなった後も、北方領土に起こった問題が語り継がれてほしいと思う。同じ悲劇が二度と繰り返されないために。いつか日本とロシアが寄り添い、助け合う美しく素晴らしい未来が来ることを願っている。

入選

北方領土のあるべき姿とは

黒部市立明峰中学校　三年　**広野　陽彩**

「北方領土問題」日本に住んでいる人ならば、誰しもがこの言葉を耳にしたことがあるでしょう。しかし、耳にしたことはあってもこの問題がどのような問題で、なぜ問題になっているのかを詳しく説明できる人は少ないのではないでしょうか。私もこの問題について詳しく知りませんでした。知ろうとしたこともありませんでした。

私がこの問題について詳しく知ったのは、昨年の夏のことでした。県の事業で北方領土に隣接する根室市を訪問させていただく機会がありました。それまであまり北方領土について知りませんでしたが、実際にこの問題について学びたいという強い興味をもち、訪問しました。北海道で体験したことはどれも貴重で忘れられないことばかりでしたが、その中でも特に強く印象に残り、今でも忘れられない

ことがあります。それは納沙布岬から見えた光景です。そこからは歯舞群島の島々が肉眼で見えました。その距離はわずか三・七キロメートルです。島々にある山の形や島の周りを巡回している船さえも、この目で見えました。それを見て、私は恐怖と疑問を覚えました。これほど近いのに、今はロシアに占領されていて、日本固有の領土のはずなのに今は自由に立ち入ることすら許されていないという悔しい現状を改めて痛感した瞬間でした。その後、元島民の方のお話を聞いたり、自分で調べ学習をしたりして、この作文を書くまで、これからの北方領土がどうあるべきかを私は考えました。

北方領土に住んでおられた元島民の方々の平均年齢は、現在八十七歳を超えています。本来であれば、元島民の方々のために、日本のために、一刻も早く北方領土を返還してもらうべきでしょう。しかし、そう簡単にはいきません。その理由として、もちろん排他的経済水域をロシアが広げようとしていることもあるでしょう。しかしそれ以外にも理由はあります。北方領土が占領されてから七十年以上が過ぎてしまった今、北方領土には約一万八千人以上のロシア人が住んでいます。それも、私たちよりも幼い子供から大人まで様々です。子供の中には、北方領土で生まれ今まで育ってきた人もいるでしょう。私たちが北方領土を返還してもらえば、日本人の元島民の「故郷」は帰ってきます。でも、それによって今のロシア人の「故郷」が奪われれば、また同じような悲劇が繰り返されるだけではないでしょうか。だからこそ私は、日本人とロシア人が共生できる北方領土であるべきだと考えます。しかし、今の現状では到底不可能だと思います。それを可能にするには、まずお互いがお互いのことを知り、互いを認め合っていくことが必要だと思います。

北方領土があるべき姿になるために、すべての人々の「故郷」を守るために、私たちができること。それは、ほんの小さなことかもしれません。でも、たくさんの人が行動すれば、やがてそれは大きなきっかけとなるでしょう。北方領土が返還されることを必ず実現するために、私たちは行動し続けます。

入選

北方領土返還へ近づくために

黒部市立明峰中学校　三年　**山本　茉莉亜**

みなさんは北方領土問題についてご存じですか。この北方領土問題は、第二次世界大戦でアメリカ軍に原爆を落とされたことと比較すると国民全員が知っている問題とは言えないのではないでしょうか。だからこそ、よりたくさんの人に北方領土問題について理解してもらいたいのです。

一八五五年二月七日に、北方領土が日本に帰属していることが国際的に認められました。島の住民のほとんどは、小規模な漁業を営んでいました。子供たちは小学校に通い、当たり前のように生活をしていました。しかし、原爆

が落とされた第二次世界大戦終戦時に、ソ連軍が北方領土に侵攻し、現在に至るまでロシアが不法的占拠をし続けています。

実際に、元島民の方々のお話を聞きました。小学校低学年の時に、突然ソ連軍が大きな鉄砲を向けて、家に押し入ってきたそうです。その後、ソ連の民間人が移住してくると、ソ連の人々との共同生活が始まりました。そんな共同生活も長く続かず、全ての日本人が島を退出させられたそうです。

私は中学生になって初めて、北方領土について詳しく学習しました。始めの頃は、

「なぜ私たちに北方領土問題が関係あるのかな」と思っていました。けれど、今自信をもっていえることは、

「北方領土問題について詳しく学ぶことができてよかった。」

ということです。学習していくうちに、自分のことと照らし合わせて考えていくと、島民の方々のお話を聞いた時は、すごく辛い気持ちになりました。私は今住んでいる地域が大好きです。きっと元島民の方々も島が大好きだと思います。そんな大好きな島で毎日当たり前のように生活していたのに、突然島に住めなくなるなんて誰も考えていなかったと思います。だからこそ、少しでも北方領土返還へと近づくことが大切だと思います。

そのために私は、これから次の二つのことを意識したいです。

一つ目は、北方領土問題をよりたくさんの人に知ってもらい、最終的には国民全員に知ってもらうことです。そのために、まずは家族や身近な人に今回学んだ北方領土問題についての話をして、よりたくさんの人に理解してもらいたいです。

二つ目は、今、当たり前のように生活できていることに感謝することです。大好きな故郷に帰りたくても帰れない。そのような人がいる中で、私たちがこのように当たり前に生活できているのは幸せなことです。そういう人たちもいるということをしっかりと理解した上で、日々の生活に感謝したいです。

今後、ロシアとの関係はよくなっていく可能性もありますが、悪くなっていく可能性もあります。次はどこの領土を取られてもおかしくありません。だからこそ情報を発信し、一人でも多くの人に北方領土について知ってもらい、北方領土返還へと一歩ずつ近づいていきたいです。

入選

変わるためには自分から

立山町立雄山中学校　三年　**杉田　蒼真**

ロシアは危険だ、危ない国だ、このように思っている人はたくさんいると思う。僕もその内の一人だ。なぜならロシアはミサイルの発射やウクライナへの侵攻を続けている国だからだ。さらにテレビやマスコミでは核ミサイルを保

有していると報道していてますます脅威だと感じた。このままではいつ戦争に巻きこまれるかも分からずとても不安だ。そんなロシアと日本には北方領土をめぐる問題が起きている。

北方領土は択捉島、色丹島、歯舞群島、国後島の四島できており、現在はロシア人の人々が約一万七千人が住んでいる。第二次世界大戦後にソ連が日本の領地である北方領土に法律的な根拠がないまま侵攻し、そこに住む人々をむりやり追い出して今に至るまでロシアが不法に占拠している状況が続いている。北方領土は日本が開拓した島であり、他国に占拠されていたこともない。また、大西洋憲章やカイロ宣言で決めた領土拡大の鉄則を第二次世界大戦の処理方針とし定め、その原則はポツダム宣言受諾にも引きつがれていることから北方領土は日本の土地だということは確かだ。

それにも関わらずロシアが自国の領土と主張するのには何か理由があると思ったためしらべてみた。最大の理由はロシアの経済の発展だ。北方領土は自然豊かな温泉や、リゾート地がありロシアの経済特区となっている。それに北方領土近海は水産資源がとても豊富で、コンブ漁をするために日本側は毎年九千万円程ロシアに払って漁をしている。それほど北方領土は資源が豊富であるのだ。それが分かって日本もロシアも排他的経済水域が大切なのだと理解した。

また北方領土には昔アイヌの人々が住んでいて、第二次世界大戦末期一九四五年、お互いを攻撃しない条約を結んでいたロシアはそれを無視して日本に攻め込み、日本が負けを認めた後も攻撃し、北方領土を占領した。このことがあって故郷に帰ることが出来なくなった人々はつらかったのではないかと思った。しかし、今北方領土に住んでいるロシアの人の事を追い出して日本が占領した場合故郷を無くした日本人と同じような思いをさせてしまうだろう。

ここまで調べ、考えた僕の結論は、今の現状ではこの北方領土を巡る問題を解決することはできないと感じた。だが、時間をかければ、この状況を変えることができると考える。今ロシアとの外交が緊張状態にあるからこそ私たちは返還にむけての準備期間だと思う。まず初めに、ＳＮＳを活用することが大事だと思う。例えば僕はオンラインゲームを通して外国の人とマッチングする。ゲームをしている時は僕とおなじ興味を持った友達のようだなと感じた。それは歴史的な国の背景や国への不満を持たない僕たち世代だからこそそう思えるのではないかと思う。三十年後、偏見や思いこみのない僕たちが話し合う事で解決できるのだと思う。だから僕たちはたくさんの人と関わり、どんな相手でも思いやる気持ちが北方領土問題の解決につながると思う。

入選

北方領土問題

高岡市立南星中学校　二年　**津幡　絢萌**

『北方領土』とは、日本北端に位置する、択捉島、色丹島、国後島、歯舞群島の四島のことである。第二次世界大戦末期の一九四五年八月九日、ソ連は当時まだ有効であった日ソ中立条約を無視して対日参戦し、日本がポツダム宣言を受け入れた後も攻撃を続け、北方四島のすべてを占拠した。当時四島に住んでいた日本人約一万七千人は一九四八年までに強制退去させられた。そして今なおロシアによる北方領土の不法占拠が続いている。

ロシアの不法占拠に対して、現在日ロ間で行われている取り組みの一つに「ビザなし交流」というものがある。それは日本国民が北方四島を訪れたり、北方四島のロシア人住民が日本を訪問したりし、相互理解を深めることを目的とした取り組みである。しかし「ビザなし交流」は現在ロシアから停止する意向を示されている。また、北方領土問題を含む平和条約交渉を中断する意向も示されている。その原因が、ロシアのウクライナへの軍事侵攻を受け日本政府が制裁を科したことだそうだ。今後も軍事侵攻が続くと、日本とロシアの関係が悪化し、さらに北方領土問題の解決が遠いものとなるだろう。

私たちはもっと「北方領土問題」について知らなければならない。私は北方領土について、社会科の授業で「日本の北端に位置する現在ロシアに不法に占拠されている島々」と習った覚えがあるだけだった。国際的で重要な問題のはずが、私にはこの程度の知識しかなかった。北方領土について知る機会は少ないように感じる。日本にとっても、ロシアにとっても北方領土問題は重要である。元島民の方々や漁業の面など、北方領土が日本に返還されることで良い点はたくさんある。しかしロシア側もそれは同じで、北方領土を自国のものにしたい理由はあるはず、だから日本だけが要求を通すことは難しい。日本とロシア両国の意見を交え、互いが納得する形でこの北方領土問題が解決してほしいと、私は思う。その解決を現実にするために多くの人がこの問題について知らなければならない。私がこの作文を書くために北方領土について調べ知ったことはたくさんある。この作文をはじめ、日本や世界が抱えている問題を知る機会をつくることで、私たちのような若い世代も問題を知り、関心をもつきっかけになるかもしれない。そうすると国民の声が政府に届き、その問題が解決に向けて一歩進むかもしれない。そういった一人一人の力によって、大きな何かを動かすことができるかもしれない。その他にも、自分にできることを考えることはとても大切なことだ。

日本とロシアの北方領土問題は、長い間話し合われ続けている。今までの話し合いでは解決せず、ロシアのウクライナへの軍事侵攻によってさらに解決への道は遠くなっている。だからこそ、解決に向けて国民一人一人が問題を意

識し行動を起こさなければならない。全て政府が解決に向けて取り組むのではなく、自分が国民として、ロシアと日本両国を考えた行動を、これから先とっていかなければならない。

入選

北方領土とこれからの未来

高岡市立福岡中学校　二年　**要藤　美生**

北方領土からの引揚者が北海道に次いで多い富山県。北方領土返還運動を巡り、北海道議会の議員が富山県内を訪れ、返還に向けた機運の醸成について、意見を交わしたというニュースを見て知りました。北方領土問題については、社会科で学習したので少しは知っていましたが、富山県と関わりがあることは知りませんでした。そこで北方領土問題についてもっと知りたいと思い、詳しく調べてみることにしました。

すると、調べていくうちに、北方領土問題はなぜ解決されないのか疑問に思うようになりました。北方領土問題が発生してから約八十年経っています。それなのに、なぜ解決されないのか、私は三つの理由があると考えました。

一つ目は、北方領土問題がたくさんの人に知られていないということです。「北方領土」という言葉自体は知っていても、特色や歴史そこで何が起こっているのかについて詳しく知っている人は少ないのではないでしょうか。北方領土について詳しく知っていないと北方領土問題の重大さが分からなかったり、実感が湧いたりしません。そのため、解決に向けての取り組みが広がらなくなってしまうと考えました。

二つ目は、お互いの納得のいく方法が見つかっていないということです。日本とロシアの国民は、北方領土は自国領土であると思っています。そのような中、北方領土がどちらかの国に渡ってしまうと、もう一方の国は納得がいきません。また、その不満から戦争に発展してしまう可能性もあります。そのため、慎重にお互いの納得のいく方法を見つけなければなりません。

三つ目は、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻の影響です。ウクライナ侵攻を日本が批判しているため、現在ロシアは、北方領土返還の交渉を一方的に中断しています。また長年続いてきた四島との交流を進めるビザなし交流の合意を破棄しました。それによって、元島民は故郷を訪れることができなくなっています。

今、北方領土問題解決のために日本に求められることは、国民全体が北方領土問題の重大さを知ることだと私は考えます。北方領土問題は、決して他人事ではありません。国民全体の問題です。特に、理解が必要なのは、これからの未来を創っていく若者だと思います。

元島民の方々の平均年齢は、約八十七歳だといわれています。その方々の思いを無駄にしてはいけません。思いを引き継いで解決を目指すのは、私たち若者の仕事ではない

でしょうか。また、北方領土について交渉を行っているのは、両国の関係者のみです。そうではなく、「ビザなし交流」を行い、両国の国民同士が意見を交換し合う機会をつくることも大事だと思います。そうすると、多様な意見が出て、新しい考え方が見つかるかもしれません。しかし、今は交渉が一方的に中断され、「ビザなし交流」も中止になっています。ロシアは、日本がウクライナ侵攻を批判しているからと発言していますが、それは筋違いではないでしょうか。北方領土問題とウクライナ侵攻は、全く別の問題です。また、北方領土問題はまだ解決されていないのに、勝手に交渉を中断するロシア。それに対し、日本は諦めずに交渉の再開を訴え続けなければならないと私は思います。

北方領土問題について詳しく調べて、この問題は簡単に解決できる問題ではないと知りました。特に今は、ウクライナ侵攻が続いており、交渉を行うこと自体が困難な状態です。しかし、そこで日本は諦めずに、これから若者を中心に問題に向き合っていかなければならないと思います。北方領土問題の解決に向けて。

入選

故郷を取りもどすために

射水市立小杉南中学校　二年　**鷺岡　煌大**

一九四五年八月八日、ソ連は日ソ中立条約に違反して日本への宣戦布告を行い、翌九日、ソ連軍が日本の領土へ侵攻を開始しました。日本が無条件降伏を受諾した後も侵攻を続け、同年八月十八日には、千島列島最北端にある占守島を、八月二十八日から九月五日にかけて北方四島に上陸し、不法に占領しました。恐しさのあまり、小舟で脱島を試みる人、ウラジオストクへ連行されて行く人などがいたという恐しい記録や、一般の家に銃をかまえて土足で侵入するソ連軍兵士が目ぼしい物を強奪したという記録が残っています。

現在、北方領土問題はいまだ、解決していません。また、二〇二二年二月二十四日から今現在も続いているロシアのウクライナ侵略による欧米や日本などによっての経済制裁により、日露関係が悪化、それによって、ビザなし交流をロシアが一方的に停止するなど返還交渉は足踏みしています。

しかし、この北方領土の返還は、かつての島民にとって、国民にとって、悲願であり、どのような状況であろうと、解決の糸口を常に見出すことが重要であると私は考えます。では、このような状況で、どのように対話を進める

のでしょう。一部の国民からは、「ウクライナ侵攻によってすべてが終わった。もう返ってこない。」というあきらめる声や、「もう『戦争』で取りもどすしかない。」という戦争で解決する声がありますが、このように対話の門戸は閉ざされてしまったのでしょうか。

私の考えとして、その考えは絶対に間違っていると思います。政府間での門戸が閉ざされたとしても、互いの歴史や文化、考え方を理解し合えば、解決の門戸が閉ざされることは絶対にありません。

私は八月十日、黒部市にある富山県北方領土史料室を訪問しました。そこでは、富山県と北方四島には多くの関わりがあることが分かりました。一つ目として越中国と蝦夷地との交易です。富山県は江戸時代、西廻り航路の中継地となり、蝦夷地で作られたコンブが流通するようになりました。また、一八七四年には今の黒部市である生地村の人々が北海道へ出かせぎに行き、大きな利益を出したという記録が残っています。二つ目は、富山県へ引き揚げた人数の多さです。引き揚げた人数は一四二五人と北海道に次いで多くなっています。そのため、富山県の発展に貢献した北方四島の返還はより重要であると思います。

最後に、私が一番心配していることを紹介します。それは、この歴史が「風化」することです。侵攻から約八十年が経ち、元島民は確実に高齢化しています。令和五年の元居住者の平均年齢は八十七・五歳であり、人数から見ても、昭和二十年の一七二九一人から令和五年には五六〇九人となり、この歴史をかたりつげるタイムリミットがせまっています。この歴史を未来へかたりつぐ時は今しかありません。そのためには、国民一人ひとりが正しい認識を深めることが重要です。故郷を取りもどすために。

入選

北方領土を取り返すために

射水市立小杉南中学校　二年　**野開　景太郎**

北方領土。この言葉を初めて聞いたのは、小学校の社会科の授業のことだった。そしてさらに詳しく知りたいと思い、インターネットを使って調べたり、家族にも北方領土のことを聞いた。そして、強制的にソ連に追い出された人たちがたくさんいることを知り、もし自分がそのような立場になったと考えると、とても恐ろしくて、ひどいことだなと思った。だから私は、少しでもこの問題に貢献できるように解決方法を二つ考えた。

まず、北方領土とは、歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島のことだ。そして北方領土は戦後ソ連に法的根拠なく占拠され、日本の領土にもかかわらず日本人が自由に行き来することができない。一九四五年八月九日、ソ連は、当時まだ有効だった日ソ中立条約に違反して対日参戦し、日本がポツダム宣言を受諾した後の同年八月二十八日から九月五日までの間に、北方領土すべてを占拠した。その後、現在まで、ロシアによる法的根拠のない占拠が続いている。

当時四島に住んでいた一万七千二百九十一人の日本人は、約半数が自力で脱出し、残りの島民はソ連により強制的に退去させられ、サハリンの抑留を経て日本に送還され、故郷を追われた。現在北方領土に居住する日本人は一人もいない。

私が考えた解決方法一つ目は、署名活動だ。だが、ただ署名活動をしてもだめだと思うので、日本だけでなく他の国でも北方領土のことを知ってもらい、いろんな国で署名活動をすることで、ロシアにも私たちの気持ちが届くと思った。

二つ目の解決方法は、北方領土問題をたくさんの人に知ってもらうことだ。インターネットなどで、北方領土問題に関する世論調査を見たところ「北方領土について聞いたことはあるが、現状までは知らない」の人たちがまだまだ多く、北方領土に関する広報啓発活動については「あまり参加する気はない」の人たちがたくさんいて、北方領土問題に関心がある人たちはまだまだ少ないと感じた。なので北方領土問題をたくさんの人たちに知ってもらうことが大切だと感じ、北方領土について何で知ったかを調べてみたところ、「テレビ、ラジオ」が多く、「ＳＮＳ」が少なかった。なので、ＳＮＳを使い北方領土問題のことを広めていけば、よりたくさんの人に関心を持ってもらえると思った。

北方領土は、一七世紀初めにはすでに日本とかかわりをもち、一八世紀末からは江戸幕府の直轄地として、日本人の手によって開拓された。そんな歴史のある、大切な領土を取り返すために、私の文が少しでも役に立てばいいと思う。